

## はじめての高分子化学

井上祥平 著

化学同人 B5判・188頁 定価2940円(本体2,800円+税)

著者は、エポキシドの不斉選択重合による光学活性高分子の合成、炭酸ガスをモノマーとする高分子材料の開発、さらに不死身(イモータル)重合の発見など数々の世界的業績で著名な研究者ですが、子供向け絵本「かたいものやわらかいもの」(岩波)など広い読者層を対象とする執筆活動でも高く評価されている。本書は、まえがきにあるとおり、大学での一般教育や専門科目としての高分子化学のコンパクトな入門教科書としてだけでなく、非化学系学科・専攻の卒業生が電気・エレクトロニクス、機械・自動車、薬品・バイオ、土木・建築分野の研究開発で高分子材料に出会い、高分子のサイエンスの基礎を身につけ変幻自在な高分子の特性を理解してさまざまな用途に活用するための手引きとして工夫が凝らされている。高分子科学の基礎を体系的に学ぶ企業人向け講座の必要性・重要性は産学双方で強く意識され始めており、学会・大学で折に触れ企画・開催される公開講座・講習会の教科書・参考書としても活用が期待される。

本書は、著者ご自身の「高分子合成化学」(裳華房)および「高分子材料の化学 第2版」(丸善)をベースにしながら、入門書としての配慮が行き届いたものになっている。平易で読みやすいテキストは、子供向けの著作も手がける著者の真骨頂と思われる。さらに各章・各ページにはキーワードが配置され、多くのイラストも加えられて視覚的理解の促進も図られている。また、高分子材料が使われる最終製品の写真、高分子のサイエンスの発展の歴史を紹介する「コラム」が盛り込まれ、最近の社会的

関心に応えるエコ・バイオ高分子材料に関してもそれぞれ1章が当てられている。これら全体で15の章それぞれが10ページ程度で構成され、これは大学での基本的な学期講義数に対応している。ただ、著者の専門である高分子合成・重合化学に関する各章には、著者の研究者としての「思い」がより強く反映し、各章ごとの記述にはやや濃淡が感じられる。校訂も入念に行われ、評者の目に留まった誤植はキチンの構造式のみであった。

「ゆとり」教育の世代が続々と入学している今日、同一年齢層による「横」の競争を「偏差値」ベースで行った結果、入試対策用に最少の科目に注力する個々の学生には合理的な選択が行われ、極端には未履修の「必修」科目まで現れ、これは社会的な許容限度を逸脱したということ、今度はややヒステリックな揺り戻しが検討されているのは日々のニュースで見られるところです。とまれ大学教育の現場では、教科書の選定を含め毎日の授業にも新たな対応が求められます。本書は、子供たちを含め広い読者層を対象に健筆を揮う著者ならではの、「食わず嫌いの子供たち」のために昨今スーパーで販売される「やわらかく、骨まで食べることの出来る焼き魚」でしょうか。栄養も味も問題なく、次の世代はこうして育ててゆくことになるのでしょうか。未来は君たちのものだ。良くも悪くもアカデミックな教科書(骨が喉に哽える魚)で育った私たち老兵は消え行くのみということでしょう。

(手塚育志)

